からしだね

2021年12月号
(575号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm

本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父の巻頭言
「クリスマスはすぐそこに！」
The heading article in English having its title for "Christmas is near!" Fr. Nonoy Plaza
ガラスケースのみことばとその解説
12月5日に開催される待降節黙想会に向けて
大人の日曜学校だより
納骨室で故人を偲び、お祈りをしました。
主日のミサで七五三を祝う
冬に備えて教会樹木の剪定会
12月のカレンダー
12月･黙想会等のお知らせ　黙想の家より
今月の表紙絵について

巻頭言

クリスマスはすぐそこに！

ノノイ神父

クリスマスが近づきました。角を曲がれば、もうクリスマスというわけですが、きょう（１１月２８日）待降節にはいったわたしたちには、イエスの厳粛な誕生を毎年記念する典礼の準備が始まります。御存知のとおり、待降節から新たな典礼年の開始となります。３年周期になっている日曜日ミサ朗読もＢ年をあとにしてＣ年に入ります。

今年のクリスマス、どんないいことが待ち受けているかな、などとわたしはふと思ってしまうのですが、これはおそらく世界がいま現にくぐり抜けているすべての厄介ごとを自分が意識してしまうからでしょう。なるほど日本では新たにコロナウィルスの支配から抜け出したところではありますが、頭上にはまだ不確かな雲が漂っているみたいです。いまも専門家は第６波感染の可能性とその備えが必要だと不安気です。事実この世界的な伝染病のおかげで、地球上いたるところどれほど苦しみと不安に襲われたか、だれも否定できない。

でもクリスマスのことを考えると、すがすがしく癒されるところがあると思います。あれこれ不便なことや試練も多かった（愛する人たちや教区の人たちが逝ってしまったことも含めて）ですが、わたしたちほとんどの人が嵐をなんとか切り抜けました。いつもどおり勇敢だし喜びを挫（くじ）くものすべてを食い止め、クリスマスの輝かしい季節を楽しみにしているいまは特にそうなっているでしょう。イエスを信じる者として、わたしたちには強くて溌溂とした信仰が与えられている。人生の明るい側面をみるようになる信仰をです。

この信仰は使徒たちが公に語りかけ、そして生きた信仰とまったく同じです。福音書の著者ヨハネとおなじように、人生のもっと輝かしい側面に目を向けるようになる信仰を私たちも身に着けているのです。ヨハネ福音書にはキリスト降誕の場面は描かれていません。そのかわり、最初のクリスマスとは、いったいなんだったのか美しいイメージが与えられます。対照的な事実を用いるのを愛したヨハネは、クリスマスを暗闇の真っただ中に輝く光として描きだしたのです。じっさい暗闇は大いなる広がりを見せていました。けれど、そうした恐ろしい陰気さも光には歯が立ちませんでした。光はイエスです。イエスは人となり、わたしたちのなかに住まわれたのです。ヨハネはこう言います―「言葉は肉となって、わたしたちの間にやどられた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」（ヨハネ１：１４）[注]

さらに最初の手紙のなかで、ヨハネはこのおどろくべき神秘を語りつづけます。彼の証言はこうです―「はじめからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言葉について。―この命は現れました。御父とともにあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。―わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたに伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちとの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。」（ヨハネの手紙一1：1ー４）

毎年よろこびながらクリスマスを祝いますが、別に１２月２５日が実際にイエスが生まれたその日だからではありません。ほんとうのことを言えば、その日がいつだったか知る人はいない。むしろ、わたしたちがクリスマスを祝うのは、神が人間に与えられたもっとも偉大な贈り物を強調したいからです、わたしたちに天国に至る道を開くために御子が来

られたことを。あるいは『ヘブライ人への手紙』が語るように、「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られましたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」ということは、ある注釈者の適切な言葉どおり、可能なもっとも語りやすいかたちで神はわたしたちのもとに来られたのです、つまりわたしたちの一人として来られた。わたしたちのあいだに住まわれたのです…。これこそがクリスマスの意味です。神は私たちのあいだに入ってこられた。わたしたちとともに暮らしておられる。神はわたしたちの同伴者、私たちと共に生き、わたしたちの喜びや苦しみを共にされておられる。聖体拝領のなかで、わたしたちの糧となっておられる。神はベツレヘムでわたしたちのあいだに住まわれ、みなさんの家庭に住んでおられる、わたしたちが愛によって結ばれたときは特にそうなのです。時の終わりまで、クリスマスの日もいつの日も、みなさんのなかに住んでおられる。みなさん教会を支えてくださってほんとうにありがとう。メリー・クリスマス。

さいごに、２０２１年はほとんどの人にとってあまりいい年ではなかったかもしれない。けれども２０２２年こそ、よりよい年となるよう、みんな希望をもって祈ろうではないですか。

注　出典を広報委員会が追記。

The heading article

Christmas is near !

Fr. Nonoy Plaza

Christmas is near! It is just around the corner, so to speak. Now (i.e. the 28th of November), we begin the liturgical preparations for the annual solemn commemoration of Jesu's birth by entering into the season of Advent. And Advent, as we all know, is also the start of a new liturgical year. We leave behind year B and enter into year C of the three-year cycle of Sunday readings.

What good can 2021 Christmas give us? This is but a passing thought of mine, probably brought about by the awareness of all the troubles the world has been going through. Here in Japan we have just freshly come out from the clutches of Corona virus. But still, some clouds of uncertainty still hover over us, I think. For even now, experts are still concerned about the possibility of another wave of infections and the need to prepare for it. Indeed, nobody can deny how this pandemic unleashed innumerable sufferings and uncertainties in all four corners of the globe.

Nevertheless, I think the thought of Christmas should bring in some refreshing and consoling elements. Thankfully though, despite countless inconveniences and trials, including the passing away of our loved ones and parishioners, somehow most of us have been able to weather the storms. We continue to be courageous, resisting anything that dampens our joys, especially as we look forward to the radiant season of Christmas. As believers of Jesus, we are blessed with a faith that is resilient and strong. A

faith that learns to look at the brighter side of life.

This is the same faith which the apostles professed and lived! And like St. John the evangelist, we also possess a faith that learns to see the brighter side of life. St. John's gospel by the way doesn't have the nativity scene. But in lieu of that, he gives us a beautiful image of what the first Christmas was all about. In his love for using contrasting realities, John pictures the first Christmas as the shining of the light in the midst of darkness, indeed, so much darkness! But such a terrible gloom could not simply overcome the light. And the light is Jesus. He became man and pitched his tent, as it were, among us. He says: "And the Word became flesh, and made his dwelling among us, and we saw his glory, the glory as of the Father's only Son, full of grace and truth.

Moreover, in his first letter, John continues on describing this amazing mystery. He testifies: "He who was from the beginning, whom we have heard, whom we have seen with our eyes, upon whom we have gazed, and whom our hands have certainly touched: He is the Word of Life. And that Life has been made manifest. And we have seen, and we testify, and we announce to you: the Eternal Life, who was with the Father, and who appeared to us. He whom we have seen and heard, we announce to you, so that you, too, may have fellowship with us, and so that our fellowship may be with the Father and with his Son Jesus Christ. And this we write to you, so that you may rejoice, and so that your joy may be full." (1Jo 1:1-4, CPDV)

Every year we joyfully celebrate Christmas not because the 25th of December truly is the exact day when Jesus was born. Truth is, nobody knew when that day was. Rather, we celebrate Christmas because we want highlight the greatest gift God has given to mankind, namely the coming of his Son as man in order to open for us the way to heaven. Or as the letter to the Hebrews says, "In times past, God spoke in various and partial ways to our ancestors and the through the prophets; in these last days, he has spoken to us through the Son …" In other words, as one commentator aptly put it, God came to us in the most relatable way possible: as one of us. Pitching his tent among us…This is what Christmas means: God moves in with us. He makes his home with us. He accompanies us, lives with us, shares our joys and our struggles. He becomes a meal for us that the Eucharist. God "pitched his tent" among us in Bethlehem, and continues to live with us in your homes especially when we are bonded by love. On Christmas Day and every day, until the end of time. THANK YOU SO MUCH FOR ALL YOUR SUPPORT! MERRY CHRISTMAS!

Once last thing, 2021 may not have been a very good year for most of us. But let's all hope and pray that 2022 will be better.

12月・1月のガラスケースのみことば

私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたことは私にしてくれたことである

マタイ　25･40

（福音宣教委員会撰）

12月・1月のみことばについての解説　ノノイ・プラザ神父

この聖なるみ言葉は、マタイによる福音書の最後の審判の場面に記されています。その中で、イエスご自身が弟子たちに貧しい人々に対する接し方によってどのような結果になるかを教えられました。それは、もし彼らが貧しい人々に救いの手を差し伸べれば、永遠の命を得ることができる。しかし、彼らが助けを必要としている貧しい人々に対して見て見ぬふりをした場合、天の国を受け継ぐことはできない、と教えられたのです。

旧約聖書には、常に助けを必要としている人々に気を配って欲しいという神の願いが様々な箇所で表現されています。箴言19章17節には「弱者を憐れむ人は主に貸す人。その行いは、必ず報いられる」と簡潔に書かれています。苦しい状況にある人々に親切な行いをした者を主はよく覚えておられ、その行いに対して報いられる、ということでしょう。

私たちはこのことを常に考え、そして祈る必要があります。巡礼を通して神の現存を体験するために、多くの人々が聖地に行き、また、他の人々は、断食し、祈り、そして神の言葉を学ぶことにより、カトリック教会の慣習を忠実に守ってきました。これらはすべて称賛に値します。しかし、これらの行いを私たちが慈愛の気持ちを持ってしないのであれば、何かが欠けているのです。

最後の審判で言われているように、私たちが空腹な人、喉が渇いた人、病気の人など苦しい状況にある人々に対して何をしたか、何をしなかったかに基づいて、神は私たち一人ひとりを評価されるのです。つまり、助けを必要としている人々に対して私たちがどれだけ関心を持って具体的に行動したかによって審判を受けるのです。

私たちが地上で与えられている命の時間は短いのです。ですから、手遅れになるまで待つことをしないでください。あなたが今月のみ言葉を具体的に実践するなら、私たちが永遠の裁判官である神のみ前に向かい合って立つとき、「ようこそ、あなたのために用意された王国を受け継いでください」と神が仰るのを聞けるかもしれません。

12月5日に開催する待降節黙想会に向けて　　研修委員会

12月5日午後1時より 稲葉善章神父様をお招きして、待降節黙想会を開催致します。場所は池田教会聖堂にて行いますが、座席に空きが無い場合はカール記念館からでもWeb中継にて参加出来る様に準備いたします。今回はいつもと違う日程となっており、戸惑われる事もあると思いますが、実りある黙想会にしたいと考えておりますので何卒ご理解ご協力をお願い致します。当日の第２ミサ終了後の日程は以下の通りです。

- **午前11時　～　午前12時：許しの秘跡**

（予約表を当日聖堂入り口の掲示板に貼付ます。稲葉善章神父とノノイ・プラザ神父）

- **午後１時　～　午後２時：待降節黙想会「十字架を見つめ、私の日々を想う」**

（当日ミサが２回に分かれている事もあり、黙想会の講話は午後からのみ）

（当日稲葉神父様がご用意されたプリント二枚を配布予定です）

今回の黙想会は、『からしだね』568号（2021年3月刊）に掲載致しました稲葉神父様の講話「御受難を想い起し　今の私を見つめる」に続き、御受難会修道院の設立三百周年の記念すべき黙想会となり、創立者であります『十字架の聖パウロ』のことばを導き手として、イエス様の十字架の受難を黙想する事で、私達の信仰を深め、コロナ禍という受難をイエス様と共に生き抜くための糧となる事が出来る様、願いを込めて開催致します。

皆様のご参加をお待ちしております。

大人の日曜学校便り

10月24日（年間第30主日）

「先生、目が見えるように
なりたいのです。」

マルコによる福音10章46-52節

新型コロナウィルス感染者もようやく少なくなり、本当に久し振り、一年半振りの大人の日曜学校の開催となりました。

カール記念館二階和室がこんなに懐かしく思えたのは初めてでした。集まった方達皆でマリア様の祈りを唱え大人の日曜学校は始まりました。

朗読頂いた後、集まって下さった皆さんがそれぞれ心に響いた箇所を一文づつ読み上げて頂き皆でその感動を分かち合いました。皆さんそれぞれ響く箇所が異なり、捉え方も違いますが 宝石の色が違うのと同じようにそれぞれ違った魅力が輝いていました。他の人の話を聞きながら、同じ個所が響いたことで共感し、より深めることが出来たり、　気にも留めなかった箇所の思いもつかない感動に、目から鱗が落ちた方もいたのではないかと思います。

そして話題は福音のイエス様やバルティマイから皆さんの日常へと移りました。バルティマイではありませんが、目が衰えだした私達へ主役が移り、話題は皆さんの日常の大変だったことや楽しかった事、知人の方の話、お孫さんの話・・・。そしてあっという間に時間は過ぎ、マリア様のお祈りをし無事閉会となりました。

大人の日曜学校が無事再開出来た事を神に感謝致します。一年半の間、教会に来ても感染予防の為長話もままならない状態が続き知らず知らずのうちに自分に閉じこもる事によって視野が狭くなり信徒の交流の大切さについても盲目になりかけていたように思います。今日参加された皆さんの久し振りに皆で話し合う時の生き生きとした目の輝きを見ながら「本当に良かった。救われた。」と感じる事が出来ました。

「そこでイエスは言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』」（52節）

イエス様が集まった私達にもそう言われたような気がしました。

研修委員会

納骨室で故人を偲び、お祈りをしました

11月は死者の月です。その最初の年間第32主日である11月7日に、聖堂脇の池田教会納骨室において、ノノイ神父の司式によって、納骨された方々などのために合同追悼祭が行われました。ご家族や関係者がお祈りを致しました。

現在の納骨室管理委員と典礼委員は祭壇などを準備し、2020年11月から2021年10月末の間に池田教会で新たに帰天された方々の関係者への連絡に当たりました。

納骨室の祭壇

主日のミサで七五三を祝う

11月15日はお子さんが満年齢で七五三になったのをご家族で祝う習慣がありますが、池田教会でも11月14日の年間第33主日に、6人のお子さんがミサの後で稲葉善章神父さんからお祝いの言葉と千歳飴の入った長い袋を戴き、ご両親と祖父母さん、そして、聖堂の老若男女の参列者の全てがその幸せに浸りました。

冬に備えて教会樹木の剪定会

暖かであった2021年もやっと晩秋らしい陽気となった11月17日（水）池田教会の樹木の剪定会が持たれた。篤志家の厚意によって池田シルバー人材センターから派遣された初老の3人の職人は8時から13時頃まで中庭と西側駐車場脇にある樹木17種類を冬季の寒さと乾燥から樹木を保護するために新枝を電動鋸（のこぎり）と鋸、鋏（はさみ）を用いて間引きする作業を行った。その結果、大木の多くの新枝・葉が切断されて、次ページにある２枚の写真から明らかなように、まるで裸にされたような有様になった。

作業内容を短く記せば、高木やイヌマキやコウヤマキ、モチノキ（２）、クスノキ、アラガシ（３）に対しては3㍍を越す高さの脚立で登り、高い太い枝や聖堂や司祭館の屋根を足場にした職人が１㍍を越す程に伸びた新枝を切り落とした。それらの長い枝は地面に立つノノイ神父さんや13名の信徒さんによって集められ、さらに剪定鋏で0.3㍍以下の長さに短くされて、９０リッターのビニール袋に詰められた。

通路脇にあるモッコクやナンテン（２）、アダンなどの新しく成長した枝は鋸や電動鋸、剪定鋏で切られ、信徒さんによってビニール袋に入れられた。一方、キンモクセイとツツジ（多）、カイズカイブ

キの垣根は電動鋸で浅く面を削るのを繰り返して樹の表面が滑らかに整えられた。垣根から切り落とされ細やな枝・葉は地面に敷かれたビニール・シートから９０リッターのビニール袋に流し込められた。

枝葉が詰められた袋の数は２１となり、枝葉の全容積は概算で1600リッターであった。樹木数が多かった聖堂改修前と今回の枝葉の全容積を比較するとほぼ同じであったことから、樹木の成育には本年の気候が極めて好条件であったことが判る。

この一年間に西側公道沿いの教会敷地に小さな樹木（ミカンとイチジク）が新たに植えられたので、2，3年すれば実が熟するのを楽しめそうだ。また、東門から入ると春の始めから晩秋まで多種類の草花が迎えてくれるようになった。嬉しい変化である。今年の剪定会でも残念だったのは、その切り落とされた多くの小枝の中には、今年もモチノキの成育中の黄色の実が混じっていたことであった。

カール記念館で作りたての中華風の炊き込みご飯の昼食を戴き、清掃と後片付けを済ました時は13時半ごろになっていた。

ご奉仕ありがとうございます。

8時30分における剪定前の中庭

剪定終了後の中庭

10時の中庭ではノノイ神父さんや信徒のみなさんが落ちた枝葉を集め始めている。

11時30分の中庭では小株の整形と細かな枝葉を集めている。

１２月のカレンダー

12/3(金)　聖体賛美式
12/4(土)　アルファ･コース　10時～
『からしだね』12月号発行
12/5(日)　待降節第２主日C年
宣教地召命促進の日(献金)
馬小屋設置
池田市歳末助け合い募金
(不参加)
待降節黙想会 13時～14時
典礼委員会
研修委員会
12/8(水)　無原罪の聖マリア
12/9(木)　聖書百週間 10時30分～
12/11(土)　ドレミの会クリスマス会(中止)
12/12(日)　待降節第３主日C年
評議会
典礼聖歌奉仕会
12/13(月)　幼)クリスマス祝会総練習
12/16(木)　聖書百週間　10時30分～
12/18(土)　アルファ･コース　10時～
中高生お泊り会
12/19(日)　待降節第４主日C年
食物の奉献
クリスマス会(中止)
日曜学校終業式
12/20(月)　(幼)終業式
12/23(木)　茶話会(中止)
12/24(金)　主の降誕夜半ミサ
19時～と21時～
教区月修　11時
12/25(土)　主の降誕　ミサ　10時～
(夕方のミサは無し)
広報委員会(編集)
12/26(日)　聖家族
家族の祝福
典礼委員会
広報委員会
12/27(月)　教区月修　11時

カレンダーはカトリック暦と昨年度末に評議会へ提出された常設委員会の活動予定、そして、聖書勉強会などの聞き取りによって作成しました。
この一年間では、新型コロナウイルス感染状況によって公開ミサをはじめ多くの行事予定の実施が突然に中止されることが頻発しました。予定が変更されることがあるので、カール記念館一階受付や行事や集会の責任者などにお問い合わせください。

12月・黙想会などのお知らせ
宝塚黙想の家

■日帰り黙想会　10：00～15:30
12月14日（火）
指導：稲葉 善章神父
12月16日（木）
指導：染野 治雄神父
12月17日（金）
指導：山内 十東神父

■ 一泊黙想会
12月7日（火）17：00～8日（水）15：30
指導：稲葉 善章神父
12月18日（土）17：00～19日（日）15：30
指導：染野 治雄神父

■ 祈りを深めるための聖書の基本
第１・３ 水曜日　10:00 ～ 12:00
指導：山内 十東神父

■ カトリック教会のカテキズム
第２・第４ 水曜日　10:00 ～ 12:00
指導：染野 治雄神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎0797（84）3111

今月の表紙絵について

聖母マリアがエリザベトを訪問している場面を描いたラファエル（1483～1520）による油彩画。1517年の作とされる。プラド美術館所蔵。

ルカによる福音書1章３９節以下にその模様が記されている。

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里へ向かい、ユダの町に行った。そして（アビア組の祭司）ザカリアの家に入ってエリザベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリザベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリザベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声を耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

そこでマリアは言った。
「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
身分の低い、この主のはしためにも
目を留めてくださったからです。
今からのち、いつの世の人も
わたしを幸いな者と言うでしょう。」

編　集　後　記

キリストにも〈いやいや期〉ありや
パンなどは食べじと口をかたく結んで
（山木礼子歌集『太陽の横』から）

俗に「魔の二歳児」という言葉がありますが、わが子も二歳の誕生日が近づくにつれ「いやいや」と言うことが多くなってきました。保育園に行くにも服を着たがらない。時間がないので泣きわめく子にお構いなくシャツやズボンを着させたり、「お友達はみんな服着てるよ。服着ないと恥ずかしいよ」となだめすかしたり。そう言いつつ、「みんながやってるから」それに従うっていうのは果たして良いことなのかという疑問も。子の個性を認めてあげたい気持ちと社会のルールを学んでほしい気持ちのせめぎ合いです。

子がもう少し成長してコミュニケーションが取れるようになると折り合いをつけていけるのでしょうか。「魔の二歳児」が過ぎれば「天使の三歳児」がやってくる、とも言うようです。

パウロ